

# トランスジェンダー をいきる (14)

「自己物語の記述」による男性性エピソードの分析

牛若孝治

## 「思癖」と「嗜癖」に挟まれた恋愛または恋愛感情

「恋愛市場主義」を問い直す

### 1 はじめに

「今、好きな人はいますか?」、「今、恋愛していますか?」

この手の質問をされる度、私は答えにつまってしまう。なぜだろうか。

確かに、「誰かに恋愛したり、恋愛感情を抱く」という感覚は、それだけで胸がときめき、どきどきする、あるいはあまりにも相手への思いが強すぎて、何も手につかない、ということもある。だが、基本的には、恋愛または恋愛感情を抱いたときの感情の動きというのは、心身ともに悩みながらも、華やいだ気分になる、と考えられているようだ。

しかし、今回テーマにする恋愛または恋愛感情というのは、そうした通常の「心身ともに悩みながらも華やいだ気分」という性質のものではない。

自己の恋愛または恋愛感情に伴う行動様式は、恋愛対象になっている他者への思い癖（思癖）と、アディクション（嗜癖）によって、特異な様相を示す。今回は、自己のそうした恋愛または恋愛感情に対してどのような行動様式をとるか、またそうした恋愛または恋愛感情をなぜ「嗜癖的」と言わなければならないのかについて記述した上で、社会に内在する「恋愛市場主義」を問い直す。

### 2 そもそも私にとって、「恋愛」とは何か

『広辞苑』（第6版）には、「恋愛」について、以下のように記述されている。

「loveの訳語。男女が互いに相手を恋慕うこと。また、その感情」

ついでに、「恋」というのも調べてみると、

「1 一緒に生活できない人や亡くなった人に強く引かれて、切なく思うこと。また、その心。特に、男女間の思慕の情。恋慕。恋愛。」

なるほど。恋愛というものは、「男女間でそれぞれが思いやったり、思いやられたりするものか。この定義に従うとすれば、身体・書類上の性別は女性・性自認の性別は男性という私のようなケースではいったいどのように考えればよいのか、という疑問が沸きあがってくる。

これは、GID（性同一性障害）当事者から聞いた話であるが、身体・書類上の性別は女性・性自認が男性（FTM）のやく 90 パーセント以上は、ヘテロまたはバイセクシュアルの女性を恋愛対象にしているようだ。ところが、私に限っていえば、恋愛対象は女性ではない。そうではなくて、女性性の高い男性である。女性性の高い男性とは、あくまで私の主観的な間隔であって、例えば声のキーが通常の男性より高い、背が低い、顔の髭が薄いなどの身体的にも女性的であるという側面もあるが、むしろそれよりは、細やかな感情表出、周囲への気配りの高さ、涙もろい部分といった「内面的な女性性」と、生真面目さといった「文化的マッチョな側面」の両面に焦点が当たりやすい。すなわち、心身共に男性であること、それでいて、内面は女性性が高く、マッチョな生真面目さを持ち合わせていることの 3 条件のうちの全部または 2 つを満たしていれば、恋愛対象になりやすい。この現象はすでに子供のころから自覚しており、現在でも普遍的な習性として、自己の中に顕在化している。

このように考えてみると、私にとっての「恋愛」というのは、単なる男女間で恋い慕い合うのでもなければ、大多数の FTM トランスジェンダーの人たちのように、ヘテロまたはバイセクシュアル女性を恋い慕うのでもない。私にとっての恋愛とは、恋愛対象は男性であるから、体・書類上の性別は女性であることで、一見異性愛のように思われるが、性自認が男性であり、しかもこの男性という性自認を中心に行っていることから、ジェンダーレベルでは男性同性愛という「ねじれ現象」が生じているのである。

### 3 「ねじれ現象」の中で生じた恋愛または恋愛感情に伴う 3 つのフォビア

このようなねじれ現象の下で生じた恋愛または恋愛感情を自覚し始めた初期のころに、下記に示すような 3 つの「フォビア」によって、恋愛または恋愛感情を「忌むべきもの」として自己の中から排除しようとする現象である。

① ホモフォビア

② 前述したように、私の恋愛対象は、女性性の高い男性であるが、彼らの多くは、身体・性自認ともに男性として一致していると思われる。したがって、私の性嗜好というのは、身体レベルではヘテロ嗜好・ジェンダーレベルではゲイ嗜好である。身体・ジェンダーともに圧倒的にヘテロ嗜好の恋愛市場においては、私のジェンダーレベルでのゲイ嗜好は容認されない。そればかりか、ジェンダーがゲイ嗜好であることで、他者とは異質の存在であると自覚し、自己への嫌悪感が生じ、恋愛感情を封鎖する。

③ ②ヘテロフォビア

- ④ 女性の身体を否定している私が、周囲からヘテロ嗜好とみなされた場合、性自認が男性であることを否定され、無理やり女性のジェンダーを押し付けられる。このような破滅の危機を防ぐために、自らヘテロ嗜好であるとみなされることに抵抗し、恋愛感情を封鎖する。
- ⑤ ③恋愛フォビア
- ⑥ 上記2つのフォビアによって恋愛感情を封鎖することで、恋愛対象になっている男性たちとの間で、いったんつながりを断ち切り、周囲から恋愛感情をひた隠しにし、自ら恋愛感情を「忌むべき感情」として排除しようとする。私はこのような現象を、「恋愛フォビア」と呼んでいる。

#### 4 恋愛または恋愛感情に伴う男性性の構築

恋愛または恋愛感情を自覚した初期の後半になると、徐々に3つのフォビアが緩和され、恋愛対象になっている男性たちとの関係性を構築しようとする。しかし、いざ彼らとの関係性を構築しようとする、心理的緊張や注意散漫などを引き起こし、自ら構築してきた男性性に悪影響を及ぼす。そこで、次の段階では、いったん自覚した恋愛または恋愛感情に対して否認・抵抗するために、行動が活発化したり、さまざまな業績を構築するなどして、自らの男性性を意地・向上しようとする時期に移行する。たとえば、スポーツや学業でよい成績を収める、芸術や創作活動では、新しい発想によって一つの作品を生み出す、持ち物や服装が一気に男性化したり、スポーツ系ブランドを着用する、などのファッションのイメージチェンジを試みる。

このような行動様式の背景には、恋愛対象になっている男性たちへの一方的な自己の「思い癖（思癖）」の要素が強い。すなわち、自己の一方的な妄想によって、恋愛対象になっている男性たちの存在を自己の中で肥大化させることによって、「フィクションとしての監視のまなざし」を自ら構築することで、あたかもそこに彼がいるかのような錯覚をも引き起こす。そのことが、「思い癖（思癖）」として、自己の恋愛感情の一端を担い、ますます男性性を意地・向上させる結果に繋がるのである。

#### 5 嗜癖的恋愛—あくなき男性性追及

しかし、このような恋愛または恋愛感情が長続きするわけではない。突如として倦怠期が訪れ、今まで構築してきたスポーツや学業成績が落ち始め、男性性の意地・向上への意欲も減退するなど、いわゆる「バーンアウト現象」が生じる。しかし、いつまでもこの「バーンアウト現象」に留まっているわけにはいかない。そこで、新たな恋愛対象者を見つけて、再び「忌むべきはずの恋愛または恋愛感情」を体験しながら、男性性を意地・向上させる。このサイクルから抜け出せない、あるいはこのサイクルによって、あくなき男性性の追及をある種「楽しんでいるところ」が、「恋愛への嗜癖性」といわなければならない。

また、恋愛対象の男性によって、自らの男性性を意地・向上していくということは、それだけで恋愛または恋愛感情が、一種の格闘技としての意味を持ち、恐れや恐怖を含んだ恋愛との勝負を繰り返しているようにも思える。つまり、私にとって恋愛または恋愛感情というのは、決して華やいだ甘いにおいのするものではなく、そこに人生の勝負氏としての意味をも含んでいるよ

うな気がするのである。

## 6 終わりに――恋愛市場主義を問い直す

現在でも、このような「嗜癖的恋愛」を繰り返しているのだが、ここに来て、恋愛または恋愛感情に変化が表れている。

「あなたは自信のある人だから、恋愛してそうな気がする」

あるとき私は、友人からそのように言われた。そこで私は逆に、友人にこう聞き返した。

「恋愛してるからって、それだけで人は自信があるように見えるんですか？恋愛してなくても、それなりに自信を持って生きている人は多いはずですよ」

友人が私に言った言葉は、社会に内在する「恋愛市場主義」に基づいているといえるだろう。また、その友人は、私が FTM トランスジェンダーであることを知っているので、恋愛対象を女性であると思っていたのかもしれない。しかし、いずれにせよ、恋愛をしているからといって、「自信がありそうだ」とか、「心理的に安定している」などと思われることに、私は疑問を抱く。なぜなら、これまで述べてきたように、私にとっての「恋愛」というのが、一般に考えられている「恋愛」とは質を異にしているからだ。恋愛しているかどうかに関わらず、それぞれがそれぞれの生きかたをしていけばよい。そういう意味で、今一度、「恋愛市場主義」を見直す必要があるのではないだろうかとは私は考える。

牛若孝治（立命館大学大学院先端総合学術研究科）